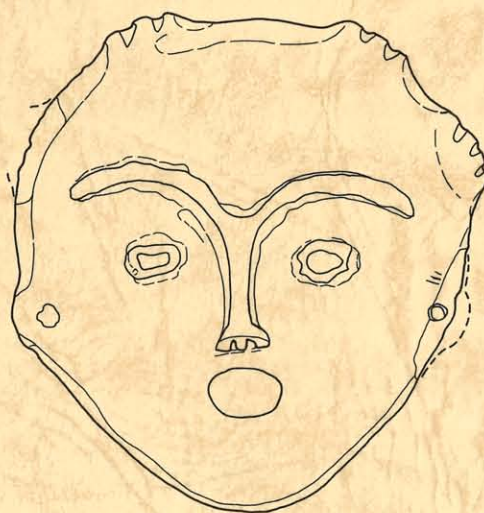


富山市埋蔵文化財調査報告133

なが おか はっちょう  
富山市長岡八町遺跡  
発掘調査報告書

—富山地区地球温暖化対策緑地（北代緑地）造成工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告—



2003

富山市教育委員会  
環境事業団富山建設事務所

なが おか はっ ちょう  
富山市長岡八町遺跡  
発掘調査報告書

— 富山地区地球温暖化対策緑地（北代緑地）造成工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告 —

2 0 0 3

富山市教育委員会  
環境事業団富山建設事務所

## 序

富山市は、北は日本海に面し、東に3,000m級の立山連峰を仰ぎ、緑豊かな呉羽山丘陵を市の西部に擁する自然環境に恵まれた都市であります。このような土地に先人が残した遺跡は、郷土富山の歴史を知るためのかけがいのない遺産であります。これを保護し、未来へ継承していくことは現代に生きる私たちの努めと考えております。

現在、富山市には約600か所に及ぶ遺跡が確認され、特に呉羽山丘陵西麓には、起伏に富んだ地形を利用して200か所に及ぶ遺跡が集中し、まさに遺跡の宝庫となっています。

呉羽山西麓には国指定史跡北代遺跡を復元整備した「北代縄文広場」があります。また、富山市で整備を進めている都市緑化植物園などがあり、歴史学習の場、憩いの場として多くの市民の皆さんに親しまれております。

このたび、富山地区地球温暖化対策緑地「北代緑地」造成に伴い長岡八町遺跡の発掘調査を実施しましたところ、縄文時代後期～晩期にかけての集落跡が発掘されました。なかでも北陸最大級となる土偶の頭部の出土は貴重な資料となりました。このような調査成果をまとめた本書が、私たち共有の財産である埋蔵文化財を理解していただく上で参考になれば幸いです。

最後に、発掘調査にご理解とご協力をいただきました地元長岡地区の皆様をはじめ環境事業団富山建設事務所、富山県教育委員会、富山県埋蔵文化財センター及び調査中や整理期間中に様々なご指導を賜りました関係各位、諸機関の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成15年 7月31日

富山市教育委員会  
教育長 大 島 哲 夫

## 序

環境事業団は、平成13年11月1日に富山市長と譲渡契約を締結し、富山市北代一般廃棄物最終処分場跡地他について、CO<sub>2</sub>を吸収削減する地球温暖化対策のために緑化し、環境に配慮した生活スタイル提案型「エコライフ北代緑地」として、市民参加により計画、施工しています。これからの環境保全対策工事、敷地造成工事、植栽工事などの施工に先立って、富山市教育委員会の協力の下に長岡八町遺跡の発掘調査を行いました。

縄文時代の大規模集落跡、多くの縄文土器片、そして北陸でも最大級の土偶頭部が発掘されるなど、先人が残した水と緑豊かな長岡・北代での暮らしぶりが窺われます。この暮らしぶりを見習って、緑豊かな環境に配慮した「エコライフ緑地」を平成17年4月の開設を目指して創っていきたいと願っています。

最後に発掘に当たって忍耐強く土と格闘された富山市教育委員会埋蔵文化財センターや作業された方々に感謝するとともに、関係各位に御礼申し上げます。

平成15年7月31日

環境事業団富山建設事務所  
所長 尾崎英男

## 例 言

- 1 本書は富山地区地球温暖化対策緑地（北代緑地）造成工事に伴う長岡八町遺跡発掘調査概要報告書である。
- 2 調査は、環境事業団富山建設事務所（所長 尾崎英男）の依頼を受けて富山市教育委員会が実施した。
- 3 調査期間、面積は以下の通りである。  
現地発掘調査 平成15年4月22日～平成15年5月30日 183㎡  
出土品整理 平成15年6月2日～平成15年7月31日
- 4 調査は、富山市教育委員会埋蔵文化財センター（所長 藤田富士夫）の学芸員 鹿島昌也、同嘱託 安達志津、同嘱託 稲垣裕二が担当した。
- 5 現地発掘調査及び出土品整理に際し、下記の諸氏、諸機関に指導協力をいただいた。記して謝意を表します。（敬称略、順不同）  
富山県教育委員会文化財課、富山県埋蔵文化財センター、八重樫純樹、米田耕之助、小島俊彰、神保孝造、斎藤隆、橋本正春、山下泰永、村井伸行、小野正文、根建工業株式会社（代表取締役 根建英一）
- 6 出土品及び原図・写真類は富山市教育委員会が保管している。
- 7 本書の本文・挿図の表示は次の通りである。
  - （1）方位は真北、水平基準は海拔高である。座標は日本測地公共座標を使用し、南北をX軸、東西をY軸とした。
  - （2）遺構番号は、溝：SD、土坑：SK、掘立柱建物：SB、穴：Pを基本とする。
  - （3）調査区は便宜的にA・B・Cの三区に分けて呼ぶこととする（第4図参照）。
- 8 本書の執筆は本市埋蔵文化財センター職員の協力を得て、藤田、鹿島、安達、稲垣が行い、各々の責は文末に記した。

## 目 次

## 図版目次

I 遺跡の位置と環境	1
II 調査に至る経緯	2
III 遺構と遺物	5
IV 放射性炭素年代測定	17
V まとめ	18
参考文献	21
写真図版	23

## 凡 例



使用・磨耗面



被熱面

第1図 長岡八町遺跡の位置と周辺の遺跡	1
第2図 明治43年陸地測量部測図	2
第3図 長岡八町遺跡範囲及び調査区位置図	2
第4図 長岡八町遺跡遺構図及び谷部土層図	3・4
第5図 B区高台部平面図	6
第6図 SK03・P05、SK09・SK10、SK12、SK07土層図	6
第7図 SK12遺物出土状況図	6
第8図 SB01平面図及びエレベーション図	7
第9図 谷部出土遺物実測図	10
第10図 谷部出土遺物実測図	11
第11図 谷部出土遺物実測図	12
第12図 土坑・穴出土縄文土器実測図	13
第13図 遺構外出土縄文土器実測図・石器実測図	14
第14図 石器実測図	15
第15図 長岡八町遺跡出土土製品と周辺地域の土偶	22

# I 遺跡の位置と環境

長岡八町遺跡は、標高約14mで富山市街地から西方約3kmの富山市北代新及び長岡地区にまたがる台地上、旧長岡村大字八町村地内に所在する。

呉羽山丘陵の北部～北西部は長岡台地と呼ばれる平坦面が広がり、開析による多くの舌状台地が形成されている。遺跡はその地区に所在する長岡小学校の北西約100mに位置する。呉羽山丘陵には、旧石器時代から歴史時代に至るまで数多くの遺跡が存在し、富山県内遺跡の密集地帯の一つに数えられる。縄文時代前期には台地周辺の沖積地に小竹貝塚などの貝塚遺跡が形成されており、近辺に古放生津潟が広がっていたことがわかる。中期には史跡北代遺跡に代表される集落跡が台地上に多く出現する。北代遺跡は旧石器時代から平安時代まで長期にわたる複合遺跡で、中期前葉から末葉までに約70棟以上の竪穴住居跡が確認されている集落跡である。後期には台地の北寄りに遺跡が分布するようになり、縄文晩期に台地周辺の沖積地に長岡八町遺跡、針原B遺跡などが分布する。また、呉羽山の西側には、西北に伸びる舌状台地の突端に営まれた集落遺跡、北代加茂下Ⅲ遺跡がある。この遺跡からは、縄文時代中期前葉新崎式期の掘立柱建物や、新崎式から中期中葉天神山式の竪穴式住居が検出された。

弥生時代末から古墳時代には、出現期古墳の杉坂古墳群をはじめ、県域最東端の横穴墓群である番神山横穴墓群や呉羽山古墳が丘陵の東側に築かれる。また丘陵の南西端には、四隅突出型方墳を有する杉谷古墳群がある。

古代においては、仏教的色彩の強い遺物が出土した長岡杉林遺跡、9世紀初頭の住居跡を擁する呉羽富田町遺跡などの集落遺跡がある。(稲垣)



番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名
1	長岡八町	6	蛭ヶ森西	11	北代村巻Ⅰ	16	北代村巻Ⅳ	21	北代村巻Ⅴ	26	北代加茂下Ⅳ
2	北代西山	7	北代村巻Ⅱ	12	八ヶ山Ⅱ	17	北代村巻東	22	北代加茂下Ⅲ	27	北代
3	蛭ヶ森貝塚	8	小竹貝塚	13	八ヶ山A	18	北代加茂下Ⅱ	23	北代加茂神社	28	北代東
4	蛭ヶ森南	9	極楽寺廃寺	14	八ヶ山B	19	北代中谷	24	長岡小学校西	29	長岡杉林
5	獅子舞塚	10	茶屋町	15	八ヶ山C	20	北代加茂下Ⅰ	25	北代大畑Ⅱ	30	八町D
										31	八町A
										32	八町C
										33	八町B
										34	茶屋町西山
										35	杉坂古墳群

第1図 長岡八町遺跡の位置と周辺の遺跡 S=1/25,000

## II 調査に至る経緯

### 遺跡名称について

遺跡は、富山市長岡及び北代新地内に所在する。明治期の地籍図を見ると旧長岡村大字八町村字四塚及び権平坂地内にまたがって位置する。現在の富山市八町は旧八幡村大字八町村を指し、地元には長岡村八町は八幡村八町から分村したとの伝承が残る。また遺跡の東側には長岡村大字針原村があった。このため、古くは遺跡名称を「八町遺跡」（1993『富山市遺跡地図』や「針原遺跡」、「長岡針原遺跡」（1993『富山県埋蔵文化財包蔵地地図』）などと称してきた。今回の発掘調査を機に遺跡名称を長岡八町遺跡と統一したい。

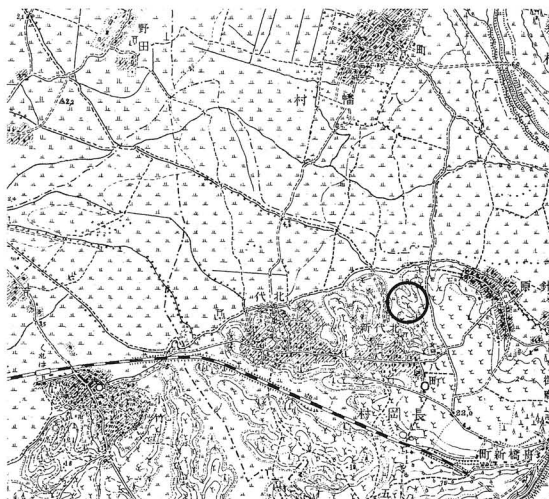
富山市民俗民芸村考古資料館には本遺跡出土の縄文時代の土笛形土製品や弥生時代のヒスイ勾玉、管玉が展示されている。また、同館に収蔵されている栗山コレクションの中には石鏃や石錐、ミニチュア石棒、玉、有孔球状土製品などがある（富山市考古資料館1987）。さらに、昭和30年代後半に富山考古学会会員山内賢一氏等が遺跡を訪れ、採集された遺物が酒井重洋氏によって紹介されている（酒井2000）。

### 調査の経緯

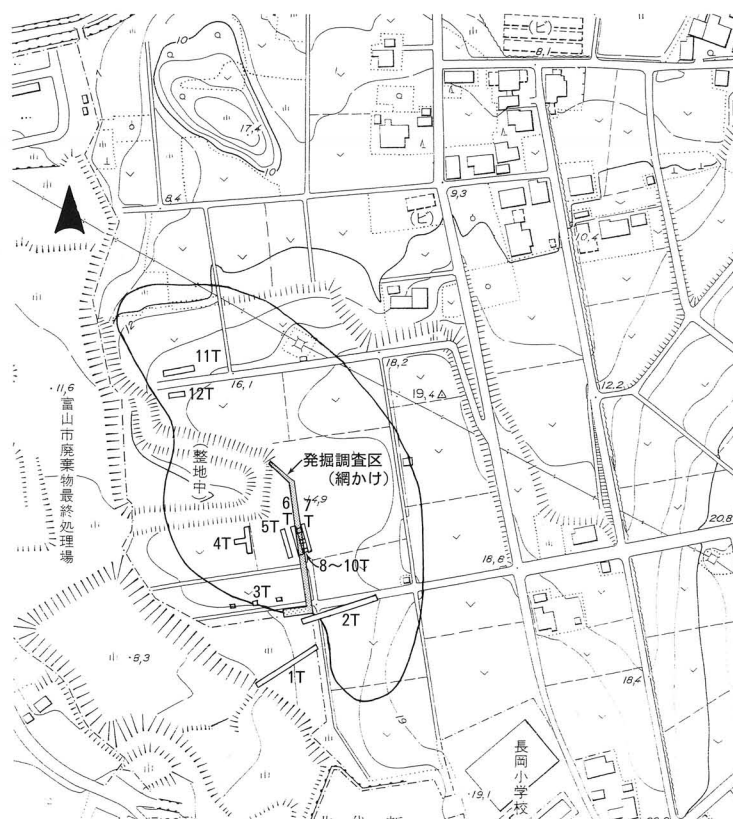
昭和48年八ヶ山地区農業構造改善事業に先立ち富山市教育委員会（以下、市教委という）によって試掘調査が実施され、遺跡の所在を確認している。

平成14年度には同処分場跡地に環境事業団富山工事事務所及び富山市環境部環境センターが事業主体となり、富山地区地球温暖化緑地（北代緑地）建設が計画された。市教委では、事業地内の試掘調査データに基づき、関係機関と協議を行い、緑地公園部については盛土保存、水路及び駐車場進入路部は発掘調査を行うこととした。

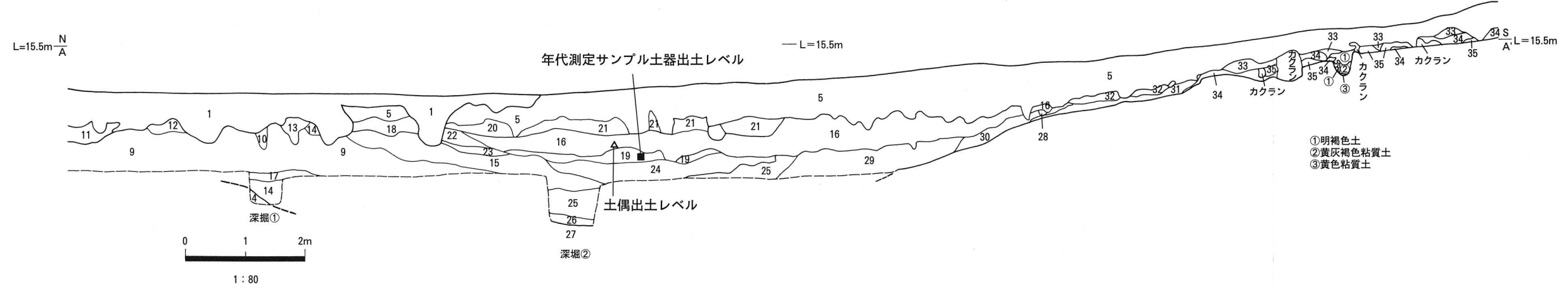
発掘調査は183㎡を対象に平成15年4月22日から5月30日まで行い、以後7月31日まで出土品整理、報告書作成を実施した。（鹿島）



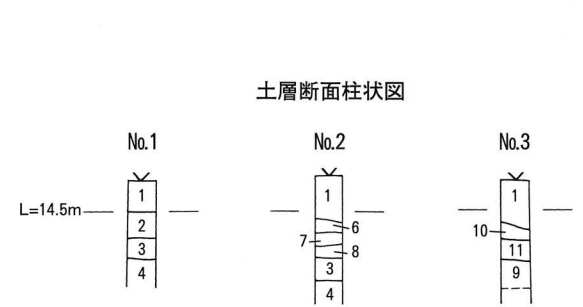
第2図 明治43年陸地測量部測図(1:40,000)



第3図 長岡八町遺跡範囲及び調査区位置図  
(1:4,000、1T～12Tは昭和48年試掘トレンチ)



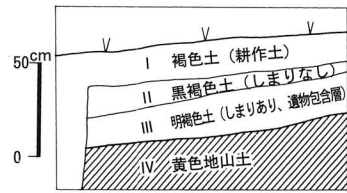
- ① 明褐色土
- ② 黄灰褐色粘質土
- ③ 黄色粘質土



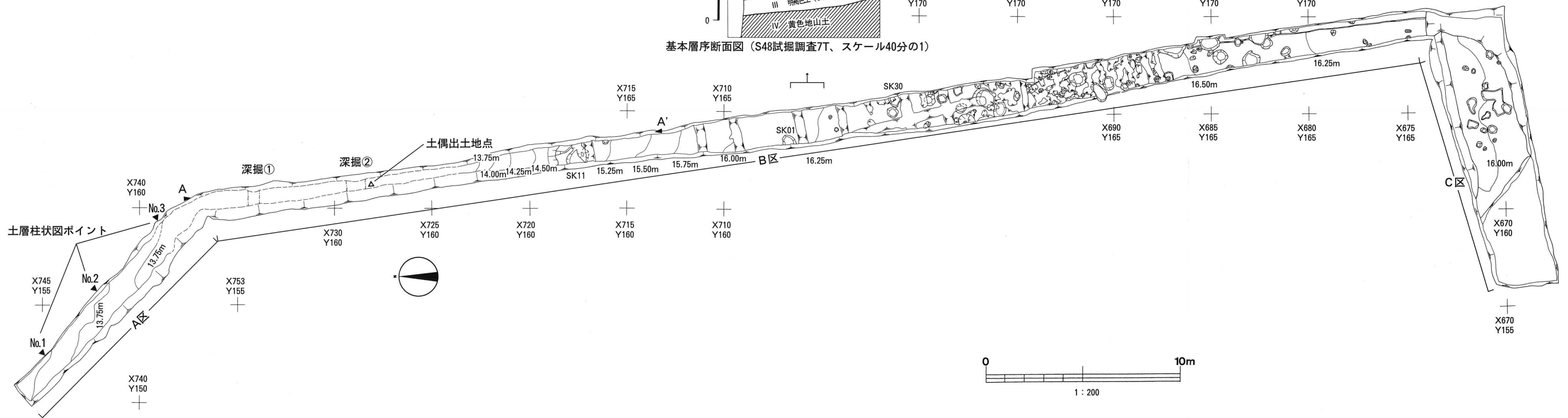
- 1 黒灰色土 (盛土、しまりなし)
- 2 黒褐色土 (盛土、しまりなし)
- 3 黄灰色土
- 4 黄色土 (地山土、若干粘性あり)
- 5 黒褐色土 (盛土、黄色土粒少量含む)
- 6 暗黄灰色土 (盛土、黄色土粒多めに含む、しまりなし)
- 7 暗灰褐色土 (しまりなし)
- 8 淡灰褐色土
- 9 淡黄灰褐色土 (遺物少量含む)
- 10 暗灰褐色土

- 11 淡灰褐色土
- 12 暗灰褐色土
- 13 暗灰色土 (かく乱)
- 14 暗黒灰色土 (やや砂質、かたくしまる)
- 15 黄灰色土 (遺物若干含む)
- 16 黄灰色土 (上部遺物包層、遺物多く含む)
- 17 暗黄灰褐色土 (炭化物や多めに含む、遺物少量含む)
- 18 黒褐色土 (盛土、しまりなし)
- 19 暗灰黒色土 (遺物集中層)
- 20 灰褐色土 (しまりなし)

- 21 暗灰褐色土 (ややしまりなし)
- 22 黄灰色土
- 23 暗黄灰色土
- 24 暗黄灰色土 (しまりあり、遺物少量含む)
- 25 暗黒褐色土 (しまりあり)
- 26 暗灰褐色土 (植物質多く含む)
- 27 黒色土 (かたくしまる)
- 28 灰褐色土 (かく乱、やわらかい)
- 29 暗褐色土 (遺物ほとんど含まず)
- 30 淡灰褐色粘質土 (黄色土小ブロック少量含む)
- 31 灰黄色粘質土 (灰褐色土ブロック含む)
- 32 明褐色土
- 33 暗褐色土 (盛土、しまりなし)
- 34 黄褐色土 (やや粘質、黄色土小ブロック、黒褐色土小ブロック含む)
- 35 灰黄色土 (しまりなし)



基本層序断面図 (S48試掘調査7T、スケール40分の1)



第4図 長岡八町遺跡遺構図 (S=1/200) 及び谷部土層図 (S=1/80)



### Ⅲ 遺構と遺物

#### 1. 調査の概要

調査区の北半は湧水のある谷地形が検出された。この谷の底に近い南側斜面から大量の土器片や石器とともに土偶の頭部が出土した。土偶の頭部は直径約9.5cmを測り、北陸では最大の土偶と推定される。B区南半部の高台部分で土坑、大型柱穴、掘立柱柱穴などの遺構が検出された。

#### 2. 調査の方法

遺物包含層の残る部分はその直上までバックホウにより掘削し、それより下は人力で掘削した。遺物包含層の無い部分については遺構検出面までバックホウにより掘削した。測量は測量機器（トータルステーション）を使用し、公共座標（日本測地）を使用した。

#### 3. 基本層序（第4図参照）

谷部は昭和に入ってからかなり埋め立てられており、第1層はその際の盛土である。谷の南側斜面では第2層以下が縄文時代の遺物包含層である。谷部南側肩から高台部にかけては、第1層、第2層（耕作土・盛土）の下にほとんど包含層は認められなかったが、試掘確認調査時に今年度調査区より若干東に位置する7トレンチで遺物包含層が確認されている。高台部は耕作土の直下が遺構検出面（黄色シルト地山上面）であり、一部は遺構検出面上部が攪乱を受けている。C区は地山土が黄色粘土で上部は攪乱を受けている。

#### 4. 遺構

谷部（第4図、写真図版2）

長岡台地の北側を東南東から西北西に走る谷を調査区の北半で検出した。調査区壁の崩落防止のため、深い部分では遺物を包含する層まで面的に発掘しそれより下は部分的な深掘りによって深さを確認した。深掘1地点では、現地表面から約1.7mの深さで黄色地山土が南に向かって傾斜しているのを確認した。谷の最深部は深掘2地点付近と思われる。黄色シルト地山土は検出されなかったが、堅くしまった黒色土まで掘削し、これが谷底部の可能性が高いと考えた。

A区は谷の北側斜面にあたり、遺物の出土はほとんどない。出土量が多いのは、南側斜面の16層とその下部に部分的に存在する19層である。この二つの層から大量の縄文土器とともに石器、祭祀遺物が出土した。19層からは土偶の頭部がうつ伏せの状態出土した。16層は縄文時代後期中葉から晩期の土器が出土している。24層から下は後期後半から後期末に属する遺物のみが出土している。谷部南側斜面への遺物の集中的廃棄は後期末以降に行われたと考えられる。

土坑（第5図～第7図、写真図版3）

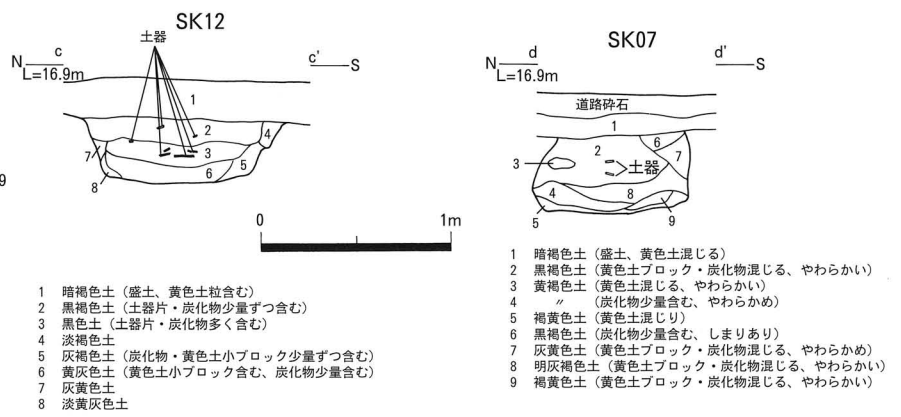
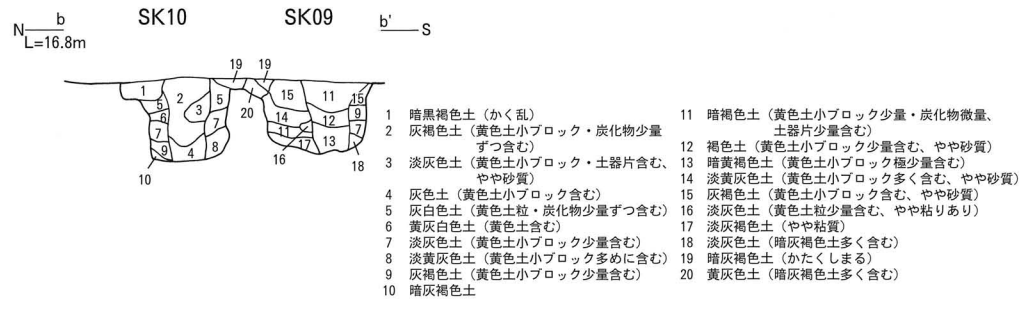
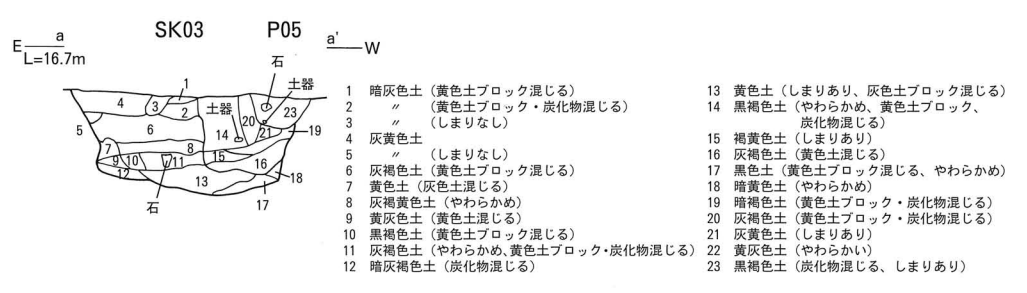
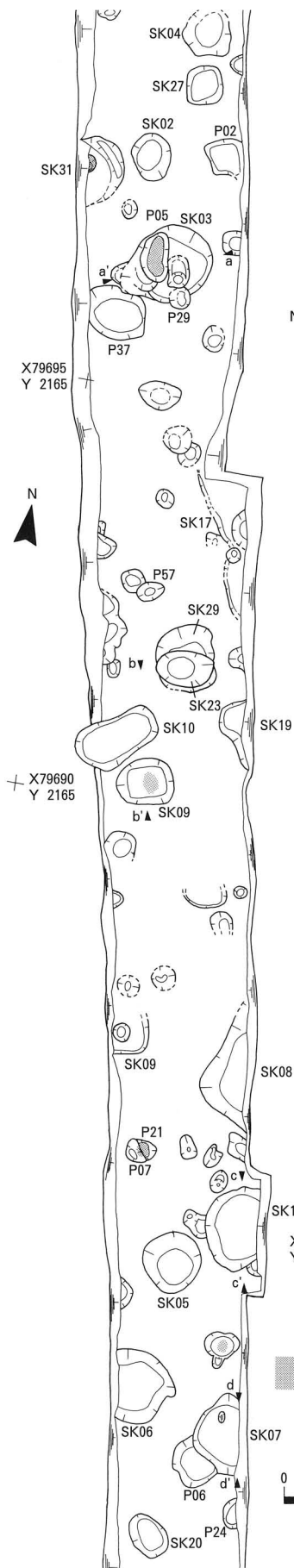
SK06 直径0.8m、深さ0.25mを測る。断面形は楕形を呈する。縄文時代後期後葉の土器の他、石錐、スクレイパーが出土している。

SK07 直径1.0m、深さ0.4mを測る。断面形は袋状を呈する。P06より新しい。覆土に炭化物を含む。縄文時代晩期の土器が出土している。

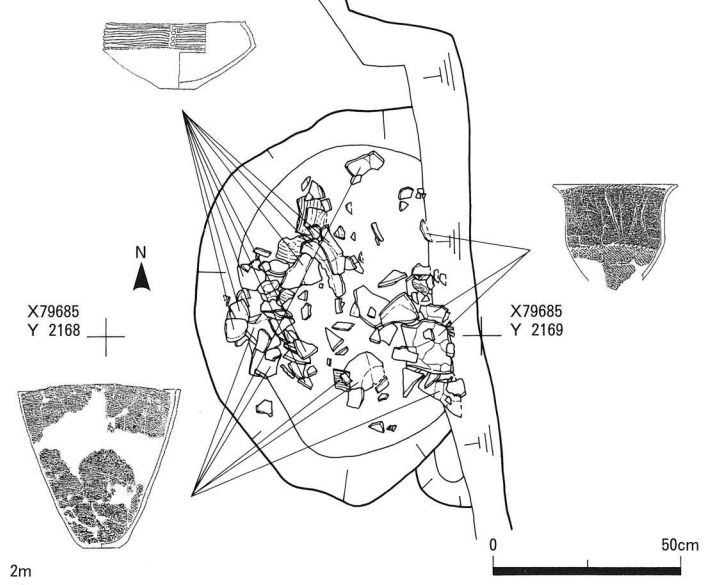
SK12 直径1.0m、深さ0.35mを測る。第1層黒褐色土・第2層黒色土から完形に近い縄文土器2個体の他、縄文時代後期後葉の土器が多数出土した。

SK08 全体形は不明で、深さは0.3mを測る。縄文時代晩期末の土器が出土している。

SK17 全体形は不明である。深さ0.2mを測る。P62より古い。SK08、SK17は竪穴住居の可能性がある。

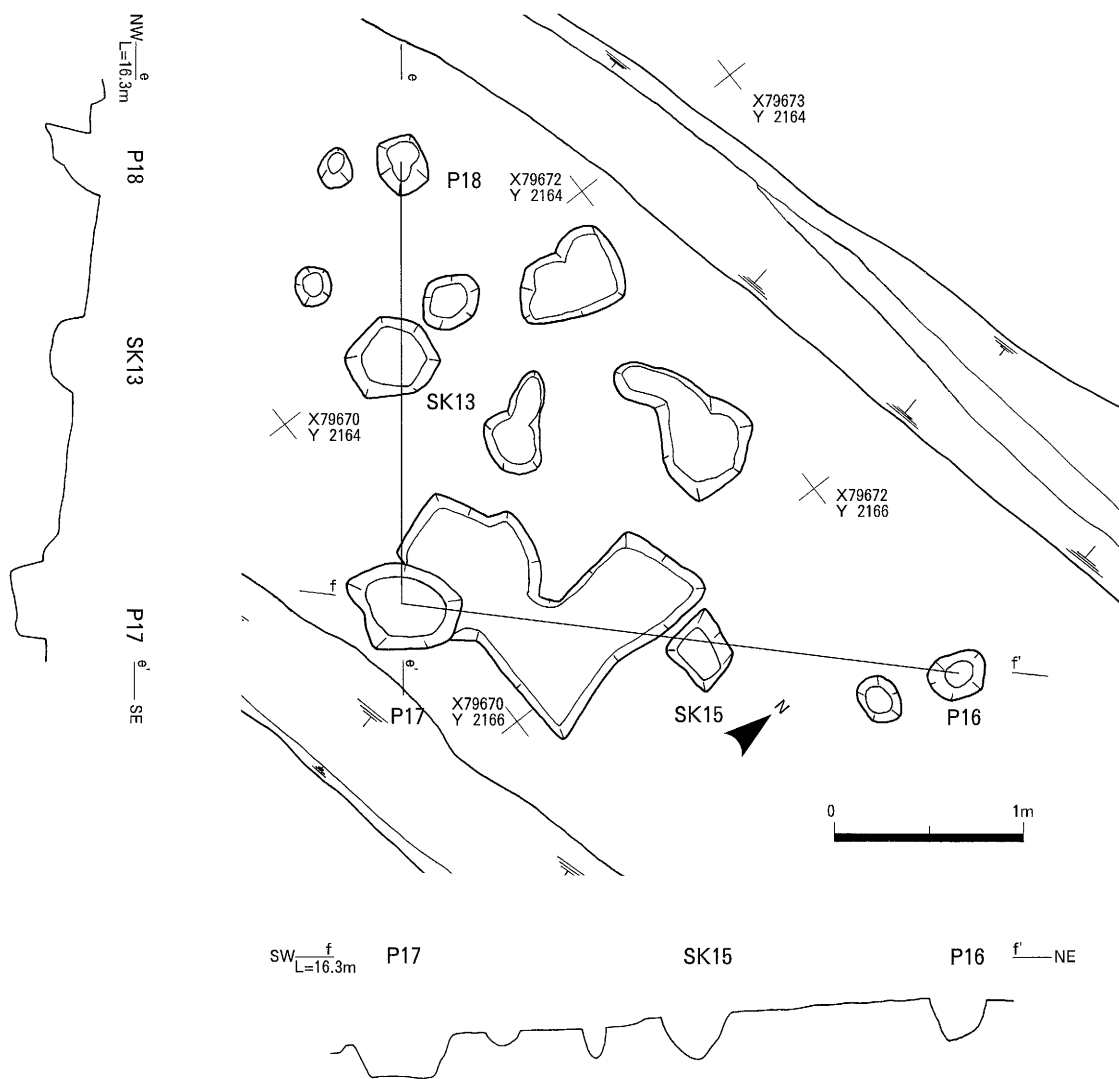


第6図 SK03・P05、SK09・SK10、SK12、SK07土層図 (S=1/40)



第7図 SK12遺物出土状況図 S=1/20 (土器はS=1/15、第12図実測図ナンバーに対応)

◀ 第5図 B区高台部平面図 (S=1/80)



第8図 SB01平面図・エレベーション図 S=1/40

大型柱穴（第5図・第6図、写真図版3）

SK 3 1 南側が攪乱を受け全体規模は不明である。深さ0.5m。直径0.2~0.25mの柱痕下部の地山はくぼみ、黒色土まじりの黄色粘土がみられる。縄文時代後期後葉の土器が出土している。

SK 0 3 P05とした部分が柱痕で、SK03部分が掘り方であるのか、またはSK03部分は別の用途の土坑となるのか、判然としない。SK03は、長径1.2m、短径0.9mの楕円形で深さは0.5mを測る。縄文時代晩期の土器が出土している。

SK 0 9 長径0.7m、短径0.6m、深さ0.4mを測る。平面形は隅丸方形に近い楕円形である。柱痕直径は約0.2mを測る。柱痕下部には黒色土まじりの黄色粘土がみられる。縄文・条痕文を施す土器が出土している。

SK 1 0 長径1.05m、短径0.6m、深さ0.45mを測る。平面形は長楕円形で、東側によったところで直径約0.2mの柱痕を確認している。建替えによって2基の柱穴が重複している可能性がある。縄文を施す土器片が多く出土している。

SK 2 3 長径0.8m、短径0.7mの隅丸方形を呈する。2回以上の作り替えがみとめられる。縄文・条痕文を施す土器が出土している。（安達）

## 掘立柱建物

S B 01 (第 8 図) 北東 2 間以上×北西 2 間以上の建物跡で、正確な規模は攪乱を受けているため不明である。柱穴覆土は非常に固く締まっている。建物主軸は N-45° - E である。建物規模は桁行検出分で 2.98m、梁行検出分で 2.40m である。柱間寸法は桁行で北東から 1.38m、1.60m、梁行で北西から 1.08m、1.32m である。

柱掘方は直径 0.18~0.52m、深さ 0.13~0.22m を測る。SK13・SK15・P16・P17・P18 からは縄文土器が出土している。SK13 では覆土に炭化物を含み、下層からは土器に重なるようにして骨片 1 点が出土した。SK15 出土の土器は縄文時代晩期中葉と考えられる。

(稲垣)

## 5. 遺物

### 谷部 (第 9 図~第 11 図)

**縄文土器** 1~3 は 9 層出土である。1 は後期末の八日市新保 I 式<sup>〔註 1〕</sup>。2 は体部に RL 原体を斜めに転がす。底部に、幅 3 mm の扁平な植物繊維の圧痕がみられる。4・5 は 15 層出土で 4 は波状口縁の波頂部に T 字文を施すもので八日市新保 II 式。5 は 2 本の沈線間に刺突文を施すもので、後期後葉の井口 III 式。6・7・8 は 24 層出土。6 は浅鉢で口唇部に短沈線と三叉文を施す。7 は口縁部外面に横位の RL 縄文を施す。8 は波状口縁波頂部の縁辺部に RL 縄文、重弧文の下部に連結三叉文を施す。8 は八日市新保 II 式。9 は 29 層出土、口縁部が屈曲して立ち上がる浅鉢で後期後葉。10~12 は 19 層出土。10 は 3 本の沈線と円形圧痕を胴部のゆるい屈曲部に施す。井口 II 式。内外面に厚さ 0.5~2 mm のおこげが付着しており、この炭化物を試料として古環境研究所の放射性炭素年代測定を依頼した。その結果、95% 確率で cal BC 1780 to 1620 の値が出ている。11 は口縁部に RL 縄文と沈線を 3 本施す浅鉢。12 は屈折連弧文 (S 字状沈線) を施す。後期中葉の加曾利 B 2 式期併行。13~37・39 は 16 層出土。14・15 は瘤付き土器である。16 は口縁部の突起部分である。加曾利 B 1 式期併行か。18 は浅鉢の口唇部に沈線を巡らし、縦の短沈線で分断する。22 は重弧文と連結三叉文を施す。20~22 は八日市新保式。23 は突出する波状口縁である。幅広の沈線を施す。24 は波状口縁の波頂端を指頭で押さえる。胴部には縦位の RL 縄文を施す。25 は波頂部に玉抱き三叉文を施す。29 は口縁部に細い刻みを入れ、細密な縦位の RL 縄文を施し、赤彩する。25~29 は晩期前葉の御経塚式。31 は口縁部文様帯に三叉文を施す。32 は口縁部文様帯に斜行短線を施す。30~33 は晩期中葉中屋式。38・40~45 は谷部盛土または 21 層の上部出土の土器である。44 は非常に細かい刺突の連続からなる擬縄文を施し、上からくずれた鍵手文を施す。晩期後葉下野式期か。45 は赤彩された無文の口縁部である。(安達)

**土偶** (写真図版 4) 46 は大型土偶の頭部である。頸部と体部の接合箇所を外れた状態で頭部のみが出土した。残存長 9.5cm、最大幅 9.5cm を測る大型の頭部である。顔面の輪郭は頭部が丸みを帯び、耳から下は逆三角形を呈する。頭部の 4 箇所幅 1.5~2.0cm、高さ 0.5cm 以下の突起が付く。1 箇所剥落し 3 箇所の突起が残る。突起頂部には 2~3 箇所の線刻が入る。中屋式土器に見られる B 字状突起に類似する。

平らに磨かれた顔面に眉から鼻が繋がった状態で Y 状に粘土の隆帯を貼り付けている。眉の隆帯は顔の輪郭まで繋がらない。鼻の穴は刺突によって表現される。目は粘土を貼り付け中央を押圧し窪ませている。口は楕円形に穿孔され頸部と体部の接合箇所まで貫通している。口の開口部は長軸 1.6cm 短軸 1.0cm を測る横長楕円形を呈するが、頸部に至ると直径 0.6cm の円形にすぼまる。この食道を表現する孔とは別に直径約 0.5cm の円形を呈する孔が頭頂部方向へ約 1.2cm 穿たれている。頸部で口から来る穿孔と交わり、体部へ伸びるものと想定される。

平らな顔面に対し、後頭部は膨らみをもって表現されている。側面を見ると顔面が約 1

cmの厚さの板状に表現され、その後ろに顔面幅よりやや小ぶりの直径約8cmの円球を半裁した粘土塊を貼り付け後頭部を表している。顔面は顎を突き出すように傾斜している。顔の左右に突出して耳穴あるいは仮面の紐孔を表現したと思われる直径2mmの貫通した穿孔がある。右側の突出は剥落しているが、穿孔は辛うじて残る。顔面向かって右の耳穴から後頭部にかけて長さ1.4cmを測る横走する細線が刻まれている。仮面を装着する際の、紐を表現したかのようにも見える。(鹿島)

**石器** 熱を受け欠損しているものが多くみられる。47～49は打製石斧である。48は片麻岩製で刃部には使用によるつぶれが見られる。礫表皮を残す。49は撥形の打製石斧である。50～53は磨製石斧である。刃部を欠くものが多い。50は片側が被熱により黒化している。53は刃部の一部で細かな擦痕が残る。いずれも研磨による面が残る。54は被熱したヒスイ片である。55・56は凹石である。55は敲打によるくぼみが長径方向に連続してある。57は石皿転用凹石である。58～60は石皿または砥石である。59は一部が熱を受け黒化している。61は筋砥石である。2面に研ぎによる細長いくぼみが見られる。欠損前に熱を受けている。62は磨石兼敲打石で、4面に磨面が残り、1面に叩きによる荒れが見られる。63は独鈷石。自然礫を敲打により成形し、中央のくびれ部と先端部を作り出す。欠損前に全体に熱を受けている。64は安山岩製の御物石器で頭部と抉り部より下部が欠損している。背面は磨耗している。欠損前に熱を受け黒化している。65は石刀である。節理により板状になった原材を研磨し、刃部と峰を作り出す。節理面に若干の研磨を施す。66は石棒。全体に被熱により変色している。両側面が剥落している。第14図114はピエス・エスキーユである。一部に礫表皮面を残す。

#### 遺構

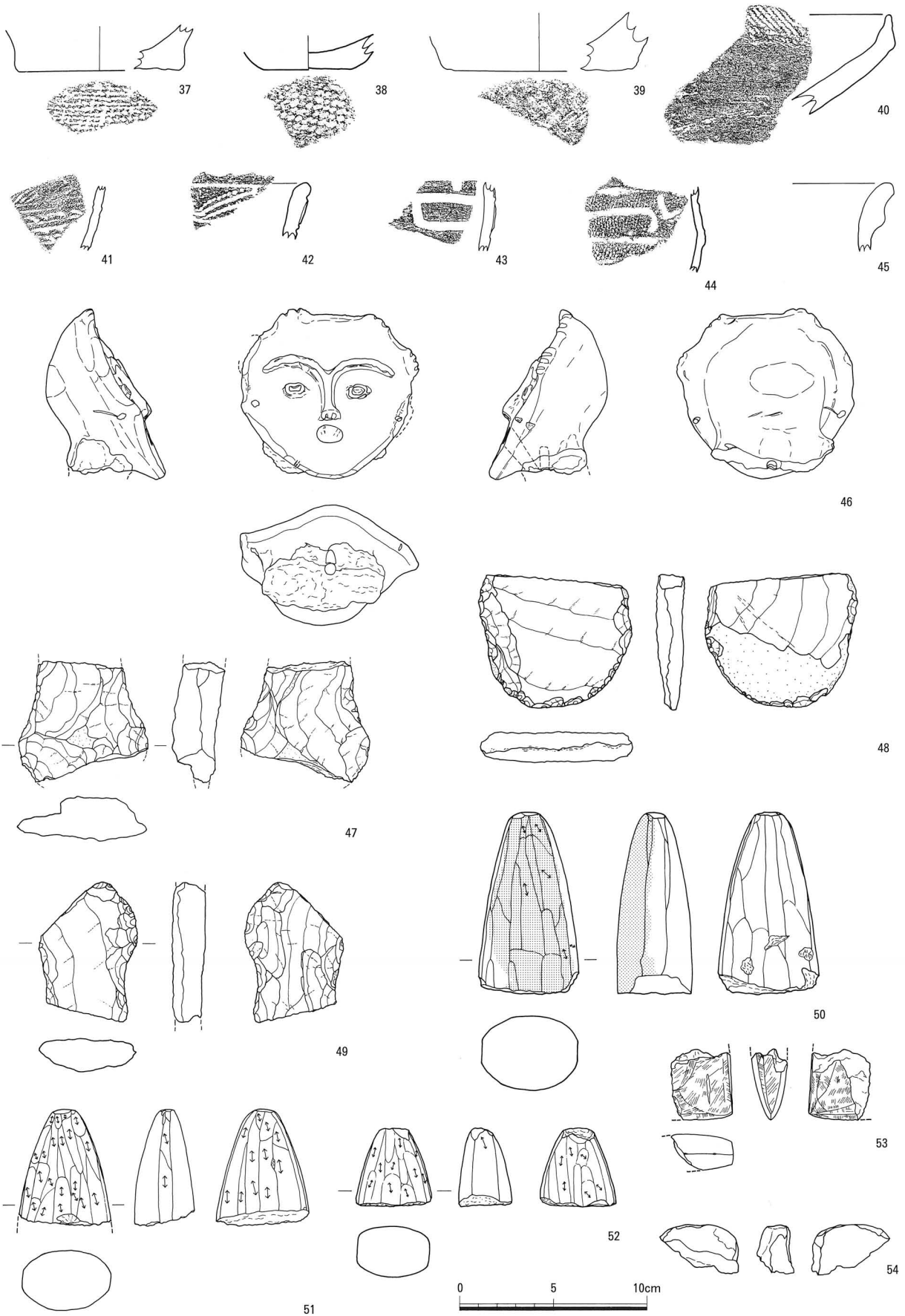
**縄文土器** (第12図) 67～75はSK12出土遺物である。67は胴部下半にRL縄文を施す深鉢で、口唇部と、無文帯と縄文帯の境目には刻み目を施す。外面には煤が付着する。68は平縁の浅鉢で口縁が「く」の字状に屈曲する。幅広の横位沈線5条を4箇所分断しその部分に4個の円文を縦に配する。屈曲部分には右方向からの刺突文を施す。69は平縁の粗製深鉢で、横・斜め方向の条痕文を外表面全体に施す。70・71は平縁の浅鉢である。70は口縁部にRL縄文の上から2条の沈線をめぐらし、縦位の隆帯に短沈線を施す。赤色顔料が残る。71は口縁部に3～4条の沈線が巡り、縦位の幅広の短沈線が切る。屈曲部分にはRL縄文を施す。赤彩されている。72・73は無文の小型の鉢である。74は口縁部に小突起をもち、内面には縦位の短沈線を、外面には縄文を施す。75は底部に、2本超え1本潜り1本送りの網代圧痕が残る。これらは井口Ⅱ～Ⅲ式期の一括資料となろう。

76は深鉢で、RL縄文地に沈線を施す。77は波状口縁の波頂部で、中屋式期。78はRL縄文が施される部分と無文の部分があり、沈線を上から施す。76・78は後期後半。79は平縁の浅鉢で2条の沈線を縦位の隆帯が切り、隆帯上に縦位の短沈線が刻まれる。井口Ⅲ式期。80は深鉢で口縁部には刻み目が入り、羊歯状文が施される。81は粗製の深鉢で口唇部に楕円形圧痕文が施される。80・81は中屋式期。82は粗製の深鉢で、口縁部にクシ状工具による連続押し引き文を施す。晩期末に属する。84は無文の小型の浅鉢で口唇部に小突起を付す。中屋式期か。85は数条の細い沈線の上に円形貼付文を付す。井口Ⅲ式期。86は波状口縁の深鉢で縦位のRL縄文の上に口唇部に添って沈線と「入」字形の三叉文を施す。御経塚式期。

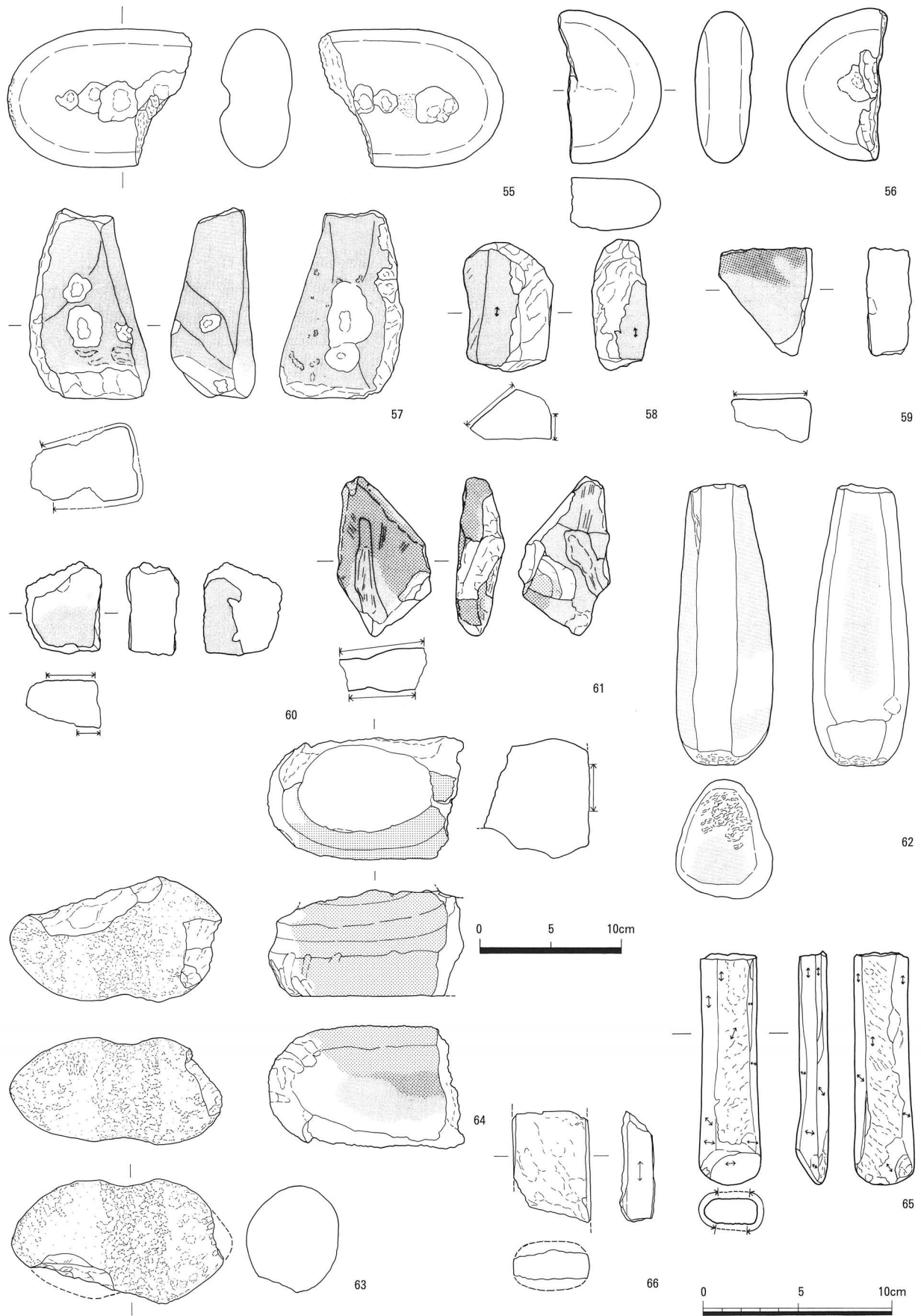
**石器・その他の遺物** (第13図・第14図) 108は石刀をスクレイパーとして転用したものである。片面が特に激しく火を受けたようで黒化する。110は石錐。先端部が摩滅している。上端面には礫表皮面を残す。117はスクレイパーである。上端に礫表皮面を残す。100は蹄鉄である。縄文時代の遺構より新しい小穴から出土した。釘を打つための穴が左右にある。年代は不明である。



第9図 谷部出土遺物実測図 (S = 1/3)



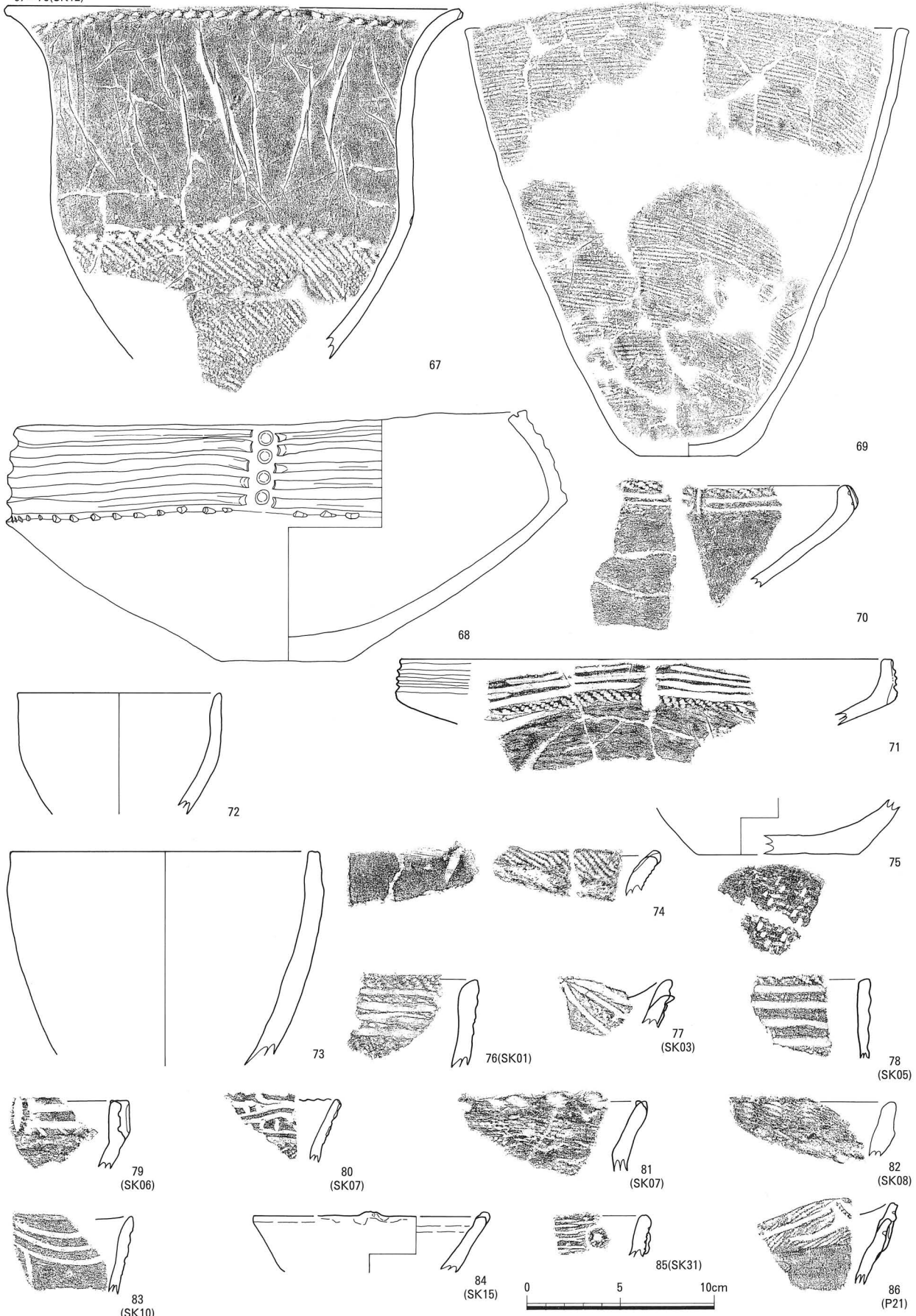
第10図 谷部出土遺物実測図 (S = 1/3)



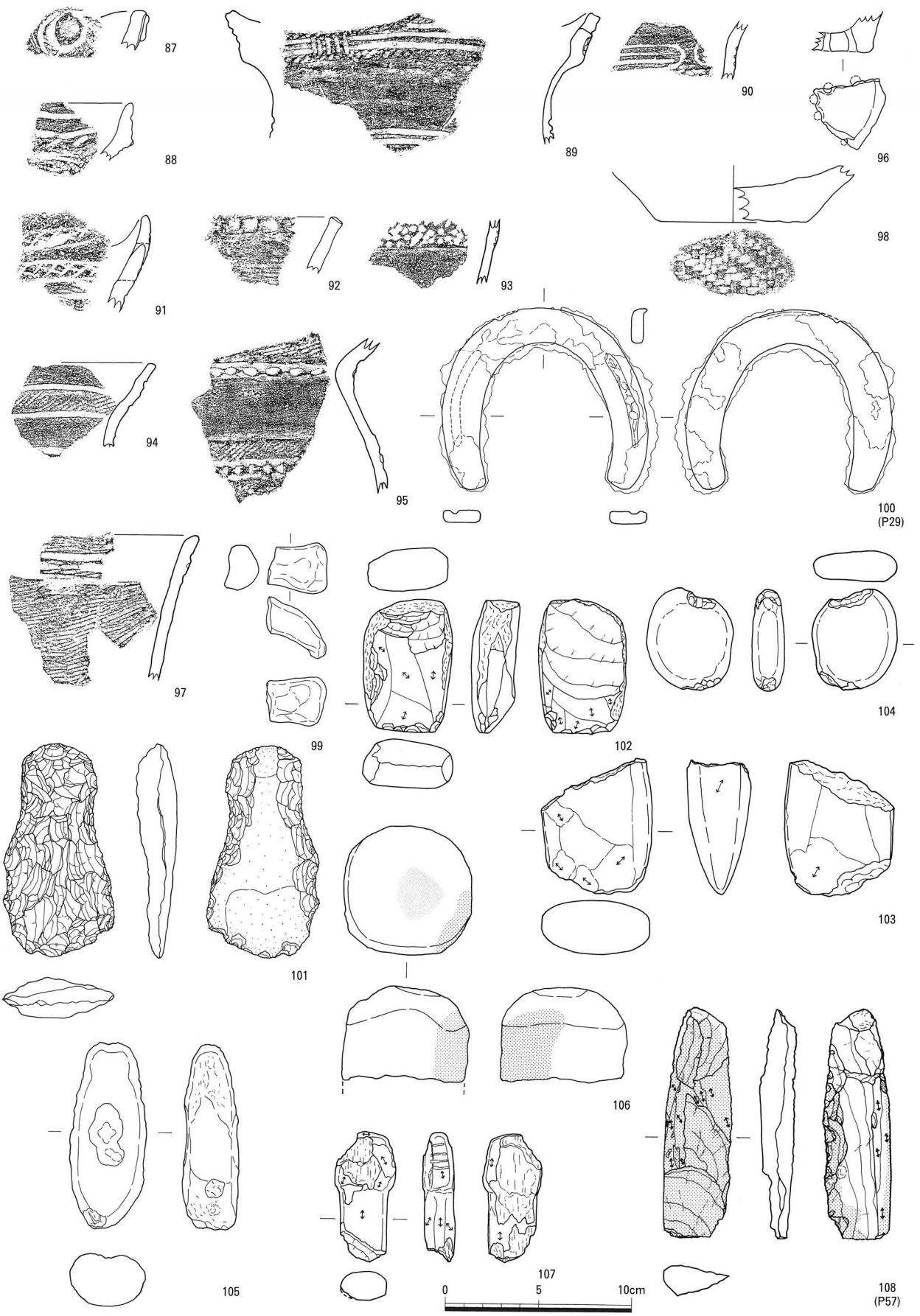
第11図 谷部出土遺物実測図 (64は S = 1/4、他は S = 1/3)



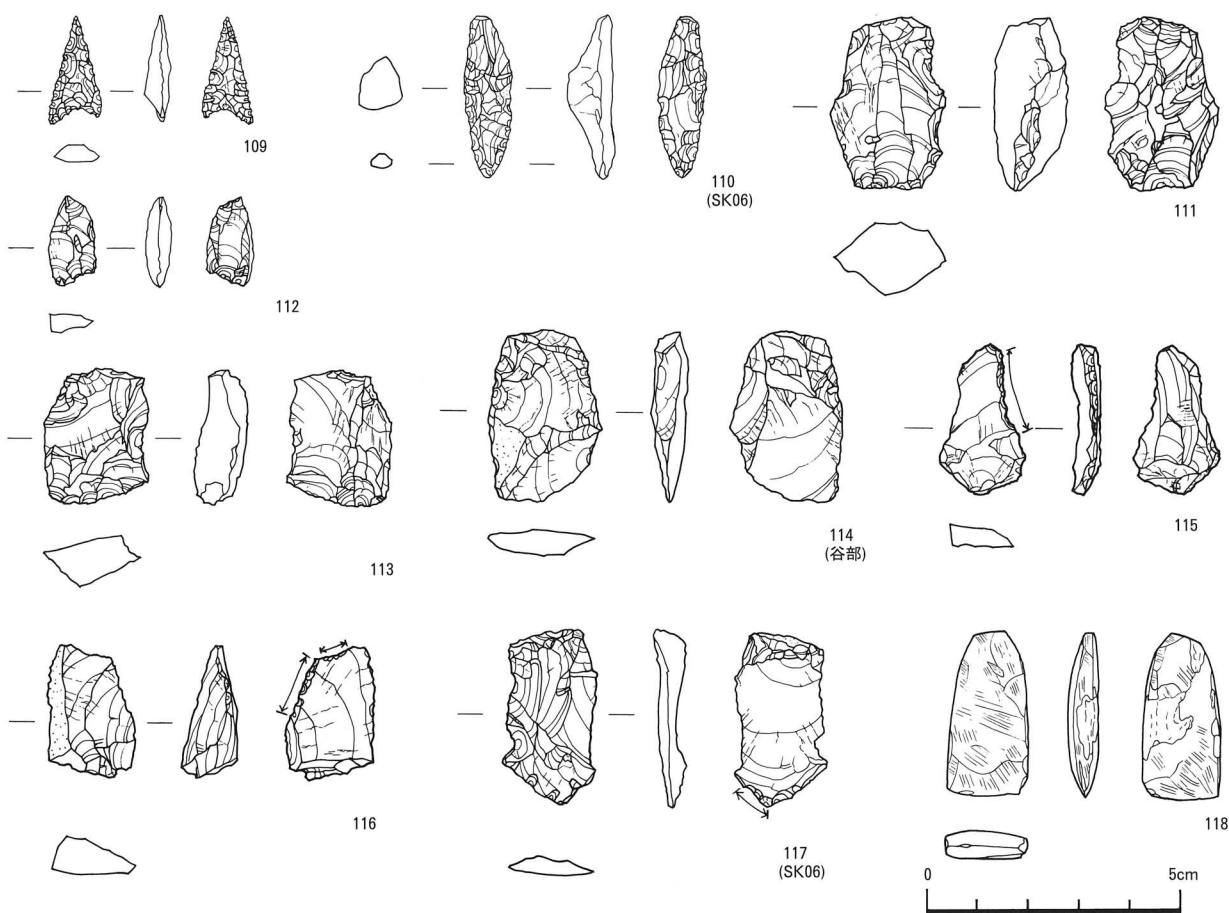
67~75(SK12)



第12図 土坑・穴出土縄文土器実測図 (69は S = 1/4、他は S = 1/3)



第13図 遺構外出土縄文土器実測図・石器実測図 (S=1/3)



第14図 石器実測図 (S=2/3、109の石鏃は亀田氏寄贈資料)

包含層、表面採集、後世の攪乱等遺構外 (第13図・第14図)

**縄文土器** 87はゆるやかな波状口縁の波頂部で、円形の貼付文を貼り付け、それを囲むように沈線を施す。沈線と円形貼付文の中央部以外は縄文を施し赤彩する。88は口縁部が屈曲する浅鉢で立ちあがり部には重弧文、屈曲部には斜めの刺突文、それより下はRL縄文を施す。87・88とも井口Ⅱ式期。89は波状口縁の深鉢で口縁部内外面に段を持つ。口縁部を巡る沈線を5条の縦位短沈線で切る。90は深鉢胴部で横位の沈線を対向する縦位の短い弧線で分断する。89・90とも八日市新保Ⅱ式期。91は波状口縁で細い2沈線間に細い沈線で格子文を描く文様を2列上下に並べる。2列の文様帯は平行ではない。滑川市本江遺跡に同様の文様があり、後期後半とされている。93は上半の隆帯上に刺突文を密に施す。器面は内外面とも丁寧に磨く。94は平縁の深鉢で、2沈線間にLR縄文を施す。御経塚式期。95は中屋式の深鉢。口縁部文様帯には縄文を施し、その下の頸部くびれ部に沈線と列点文を施す。胴部文様帯には縄文および2沈線間の縦位の列点文を施す。96は底部に複数の孔をもつ土器底部で、新潟県では多孔底土器と呼ばれ後期末を中心に出土している。器形は小型の鉢形のものが多いようである。97は条痕文の深鉢で、2沈線間に横位の短線を引く。下野式期。98は網代圧痕の残る土器底部で、2本超え、2本潜り、1本送り。

**土偶** 99は土偶の手で、後世の攪乱穴から出土している。肩から短く下に折れるタイプの腕と思われる。

**石器** 101は打製石斧。片面は前面に剝離加工を施す。稜部が摩滅している。もう片面は礫表皮を残し、上部と下部は礫表皮面が若干磨耗している。また、基部の側縁稜が磨耗し

ている。102・103は磨製石斧。102は破損品を再度成形し直している。側縁部に敲打を施す。104は石錘。扁平な河原石の両端を打ち欠いている。107は有頭石棒である。全体に火を受けて赤化している。105は小石棒を凹石に転用したものである。側面敲打により、頭部を作り出している。1面のみ凹石として使用している。106は石棒の先端と思われる。頂部が若干磨耗し、側面の一部が被熱により黒化している。109は凹基の石鏃である。111～113はピエス・エスキーユである。115は削器。116はスクレイパー。118は小型磨製石斧。その他 図示しなかったが、他に土師器椀、伊万里焼染付け小坏が出土している。(安達)

<注1>縄文土器の時期については高堀勝喜氏の編年に依った。

<注2>亀田正夫氏より寄贈された長岡八町遺跡表面採集遺物210点の内石器6点を写真図版6で紹介し、石鏃1点(109)は図示した。

## 石器一覧表

実測No.	種別	出土遺構	石材	縦(cm)	横(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
47	打製石斧	谷部	角閃安山岩	(6.45)	(6.85)	(2.30)	(103.64)	全体に被熱、基部・刃部欠損
48	打製石斧	谷部	片麻岩	(7.10)	(8.10)	(1.45)	(128.94)	刃部に使用によるつぶれ、基部欠損
49	打製石斧	谷部	輝石安山岩	(7.50)	(5.30)	(1.80)	(85.30)	刃部・基部の一部欠損
50	磨製石斧	谷部	角閃安山岩	(9.65)	(5.30)	(3.95)	(291.42)	片面被熱、刃部欠損
51	磨製石斧	谷部	安山岩	(6.15)	(4.95)	(3.15)	(108.50)	刃部欠損
52	磨製石斧	谷部	角閃安山岩	(4.10)	(4.05)	(2.70)	(67.39)	刃部欠損
53	磨製石斧	谷部	蛇紋岩	(3.75)	(3.30)	(1.90)	(26.45)	刃部・側縁部の一部のみ遺存
54	ヒスイ片	谷部	ヒスイ	2.65	4.20	1.95	21.74	被熱
55	凹石	谷部	砂岩	(7.30)	(9.80)	3.85	(343.47)	欠損
56	凹石	谷部	硬質砂岩	(8.10)	(5.40)	3.05	(161.80)	全体に被熱、欠損
57	石皿転用凹石	谷部	砂岩	(10.05)	(6.35)	4.40	(246.18)	欠損
58	石皿	谷部	砂岩	(6.90)	(4.80)	(3.00)	(11.54)	欠損
59	石皿	谷部	砂岩	(5.70)	(4.90)	(2.40)	(64.31)	被熱、欠損
60	石皿	谷部	砂岩	(4.90)	(4.00)	(2.75)	(52.13)	欠損
61	筋砥石	谷部	砂岩	(8.50)	(4.90)	(2.45)	(90.66)	欠損前被熱
62	磨石兼敲石	谷部	安山斑岩	(14.90)	5.15	6.25	(625.36)	上部欠損
63	独鈷石	谷部	花崗岩	11.70	6.60	5.70	(484.96)	欠損前全体に被熱
64	御物石器	谷部	安山岩	(13.80)	(7.50)	8.60	(1228.43)	欠損前被熱、背面磨耗
65	石刀	谷部	流紋岩	(12.20)	3.20	1.70	(105.92)	欠損
66	石棒	谷部	珪岩	(5.90)	4.25	1.65	(56.39)	全体に被熱、両側面剥落
101	打製石斧	試掘	安山斑岩	11.40	6.00	2.10	133.13	側縁稜摩滅
102	磨製石斧	試掘(5T)	蛇紋岩	(7.15)	4.70	2.60	(141.87)	破損後再成形
103	磨製石斧	盛土	花崗岩	(7.30)	5.90	3.30	(162.22)	刃部・基部欠損
104	石錘	排土	石英斑岩	5.50	4.65	1.70	59.57	
105	小石棒転用凹石	排土	砂岩	10.00	4.10	3.00	151.19	
106	石棒?	盛土	凝灰岩	(5.10)	6.75	6.80	(304.95)	全体に被熱、欠損
107	有頭石棒	表面採集	緑泥片岩	(6.90)	3.25	1.75	(47.32)	全体に被熱、欠損
108	石刀転用スクレイパー	P57	粘板岩	(12.35)	3.60	1.85	(82.23)	片面激しく被熱
109	石鏃	表面採集	ハリ質安山岩	2.10	1.00	5.50	0.54	凹基
110	石錐	SK06	凝灰岩系	3.20	0.95	1.00	2.13	先端部摩滅
111	ピエス・エスキーユ	表面採集	玉髓	3.45	2.25	1.40	11.32	
112	ピエス・エスキーユ	攪乱穴	チャート	1.80	0.95	0.50	0.65	
113	ピエス・エスキーユ	攪乱	輝石安山岩	2.65	2.05	1.00	5.00	
114	ピエス・エスキーユ	谷部	安山岩	3.35	2.25	0.45	5.05	
115	削器	盛土	鉄石英	2.95	1.75	0.50	2.12	
116	スクレイパー	排土	玉髓	4.60	1.75	0.95	3.86	刃部の一部折損
117	スクレイパー	SK06	玉髓	3.50	1.80	0.55	3.08	
118	小型磨製石斧	攪乱	蛇紋岩	3.25	1.60	0.55	5.19	

今年度本調査、昭和48年度試掘確認調査、亀田正夫氏表面採集資料を合わせた石器の出土点数内訳は、打製石斧7点、磨製石斧8点、凹石8点、石皿7点、磨石2点、磨石兼敲石1点、石鏃3点、石錘1点、石棒8点、石刀3点、独鈷石1点、御物石器1点、石錐1点、剥片9点、用途不明研磨品7点、筋砥石1点、砥石?1点である。また、今年度調査では、谷部を中心として被熱礫片が200点近く出土した。

## IV 長岡八町遺跡出土試料の放射性炭素年代測定

株式会社 古環境研究所  
松田隆二

### はじめに

本報告では、長岡八町遺跡の営まれた年代を知るため、また土器形式の暦年代を確認する目的で、放射性炭素年代測定を実施する。

### 1. 試料と方法

試料No. 1 は谷部19層出土縄文土器（後期後葉井口Ⅱ式）に付着した炭化物、試料No. 2 はS K 10最下層土壌内炭化物である。分析の前処理として酸 - アルカリ - 酸洗浄を行い、加速器質量分析（AMS法）により分析を行った。

### 2. 測定結果

試料	$^{14}\text{C}$ 年代 (年BP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正 $^{14}\text{C}$ 年代 (年BP)	暦年代 (西暦)	測定No. (Beta-)
No. 1	3410±40	-24.3	3420±40	交点: cal BC 1720 1 $\sigma$ : cal BC 1750 to 1680 2 $\sigma$ : cal BC 1870 to 1840, cal BC 1780 to 1620	179957
No. 2	3410±50	-26.6	3380±50	交点: cal BC 1680 1 $\sigma$ : cal BC 1735 to 1620 2 $\sigma$ : cal BC 1765 to 1530	179958

#### 1) $^{14}\text{C}$ 年代測定値

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、単純に現在（1950年AD）から何年前かを計算した値（ $^{14}\text{C}$ の半減期は、国際慣例に従って5,568年を用いた）。

#### 2) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

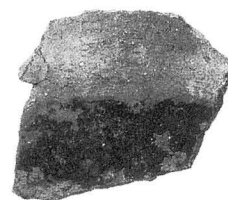
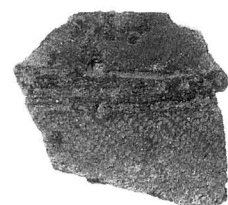
試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比（ $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ ）。この値は標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。

#### 3) 補正 $^{14}\text{C}$ 年代値

$\delta^{13}\text{C}$ 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ の測定値に補正値を加えた上で算出した年代。

#### 4) 暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中 $^{14}\text{C}$ 濃度の変動を補正することにより算出した年代（西暦）。補正には、年代既知の樹木年輪の $^{14}\text{C}$ の詳細な測定値、およびサンゴのU-Th年代と $^{14}\text{C}$ 年代の比較により作成された較正曲線を使用した（"INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration" Stuiver et al, 1998, Radiocarbon 40(3)）。暦年代の交点とは、補正 $^{14}\text{C}$ 年代値と暦年代較正曲線との交点の暦年代値を意味する。1  $\sigma$ （68%確率）・2  $\sigma$ （95%確率）は、補正 $^{14}\text{C}$ 年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の1  $\sigma$ ・2  $\sigma$ 値が表記される場合もある。



試料1；炭化物付着縄文土器  
（表・裏 10ページ No.10）

## V まとめ

### 1. 長岡八町遺跡出土土偶頭部について

#### ①土偶の出土状況

本遺跡の谷地形に堆積する縄文後期後半～晩期前半の土器廃棄層から大型土偶の頭部が顔面を下にして1点出土した。同層からは大量の縄文土器とともに石棒、独鈷石、御物石器などの祭祀遺物が被熱後欠損し、廃棄された状態で出土している。

#### ②土偶の類例について

長岡八町遺跡からはこれまでに大型品としては、山内賢一氏が同遺跡で表採した土偶の「顔」(第15図の3)が紹介されている。顔面の一部が貼り付けた部分から剥落した状態である。眉と鼻がY状に粘土を貼り付け、目は粘土を貼り付け中央を横長に窪ませて表現されている。今回出土した土偶は表採された土偶に比べやや眉が弯曲し、目を表現する粘土の貼り付けが環状になり、両目間の距離が近い点が指摘できる。顔面は丁寧に磨かれ所々に黒色のタール状の付着物が観察される。他に、土偶胴部が1点山内氏によって採集されている。表面に渦巻き文及び三叉文を組み合わせた文様が施され、裏面は無文で丁寧に磨かれている。県内では高岡市勝木原オジャラ遺跡出土の土偶頭部に眉と鼻をY状に貼り付けて表現させている例がある。

県外出土の類例としては、石川県押水町上田うまばち遺跡出土の土偶がある。側面形態や顔の輪郭が逆三角形を呈し類似する。また、長野県穂高町離山遺跡出土土偶は、やや顔の輪郭は丸くなるが、眉から鼻が粘土隆帯によって表現されている。後期中葉から晩期を主体とする遺跡である。

#### ③土偶の系譜について

長岡八町遺跡出土の土偶は、頭部を前に突き出しやや上を見上げるようないわゆる「堀之内式土偶」の形態をとる。北陸地域では後期前葉の石川県気屋遺跡や真脇遺跡に出現する。このような土偶は、後期後葉～晩期前葉には、半球状の立体的な後頭部が付く。富山市古沢遺跡や石川県上田うまばち遺跡例などがあげられる。本遺跡例と上田うまばち例は、先述した形態的な特徴も見出せる。

長野県穂高町離山遺跡出土の土偶頭部(後期前葉)は、顔の輪郭は円形を呈するが眉から鼻を粘土隆帯で表現する。離山遺跡の土偶は、ハート型土偶の系譜とされる。長野県のハート型土偶は大きく4つに分類されている。その中に後期後葉になるとY字状に眉と目を隆帯で表現し、仮面を装着したような板状の逆三角形の顔が付く、辰野町新町(泉水)遺跡例が見られる。ハート型土偶については、群馬県郷原遺跡出土の土偶(後期前葉)がその典型となる。東北南部から北関東、新潟、長野を中心に分布する。時期がやや遡り、直接的な影響は考えにくいだが、北陸での上田うまばち例や今回の長岡八町の土偶の形態や目鼻立ちの特徴から信越方面の後期前葉の土偶の影響を考えたい。

一方、眉から鼻を粘土隆帯で表現する土偶が、婦中町鏡坂I遺跡(中期)から1点出土している。頭頂部中央を凹ませ、眉から鼻を高い隆帯で表現され、鼻孔も刺突により穿たれている。隆帯は顔の輪郭までおよぶ。目も楕円形の粘土を貼り付けた後、中央部に横方向に長方形の刺突を加える。顔面左右には、目を貼り付ける前に直線的な平行沈線が3条引かれている。両目の中央や円形に窪ませた口、後頭部に赤く塗られていた痕跡が残る。

また、朝日町境A遺跡でも眉から鼻を粘土隆帯で表現する土偶(後期か)が出土している。目も円形の粘土を貼り付け、中央を刺突させ表現している。顔面左右に直線的な平行沈線が2条引かれる。

中期から晩期にかけて類似する目鼻立ちを呈する土偶が製作されている。長岡八町遺跡の土偶は、中期以来の製作技法を踏襲しつつ、周辺地域の土偶の形態的な要素を取り込み、

大型化したと考えたい。

## 2. 出土遺物・遺構から見た遺跡の性格について

本遺跡は、縄文時代後期後葉～晩期前葉頃に最も隆盛した集落跡である。縄文時代の集落は、一定の地域ごとに中心となる拠点集落が形成され、祭祀を行う際には周辺のムラから拠点集落へ人々が集まり、物資の交流のみならず、精神的な拠りどころともなっていたと考えられる。

本遺跡の谷部からは、大量の土器片とともに土偶や土笛、石棒、石刀、御物石器、独鈷石など祭祀に用いられたと考えられる遺物がまとまって出土している。当該期の一般的な集落では、このような祭祀遺物の出土は少なく、単体か2～3種類の組み合わせで出土するようである。

これら祭祀遺物の中で、本遺跡を象徴する遺物が大型土偶の頭部の出土である。土偶は女性、特に妊娠した状態を表現しているものが多く、母性女神像との見方もある。狩猟・採集の時代である縄文時代の人々は、自然界の動植物の繁殖や豊穡、子孫繁栄を願って土偶を製作し、そこに縄文人がイメージした精霊が宿り、大切に祀られたものと考えられる。試掘調査で出土した赤彩された土笛は、そのような精霊を呼び寄せるための道具であろうか。

昭和35年に本遺跡で山内氏によって採集された先述した土偶の「顔」もやはり大型土偶で、本遺跡ではこのような大型土偶を用いた大掛かりな祭祀行為が行われていたものと見られる。谷に廃棄された祭祀遺物の中には熱を受け、欠損した石器も見られることから、祭祀行為が行われた後毀され、廃棄されたものと考えられる。土偶の大きさからも本遺跡が拠点集落としての性格を有していたと推定される。

また、本遺跡の北方約500mには縄文時代中期（約4,500年前）の集落、国史跡北代遺跡が所在する。本遺跡でも縄文時代中期頃の土器が僅かながら出土するもののその主体は後期後葉以降である。北代遺跡でも顔面の直径約7cmを測る大型の土偶頭部が採集されている。北代遺跡では、集落の中央部に掘立柱建物を配置し、その周辺を竪穴住居が円環状に取り巻く構造が想定されている。集落の中央に位置する掘立柱建物の柱穴からはナガスクジラの骨が出土し、地鎮の祭祀行為が想定される。また、国内で4例しか出土していない祭祀に用いられたと考えられているタカラ貝形土製品が出土している。北代遺跡は、縄文時代中期を主体とする遺跡であるが、長岡八町遺跡で縄文後期～晩期にかけて集落が形成された背景には、拠点集落としての北代遺跡の存在もあったのではないかと考えている。

（鹿島）

長岡八町遺跡の集落は、現在畑地となっている高台部の東側に向かって広がることが予想される。本調査区の南西に向かっては再び谷となって落ち込むことからである。試掘確認調査では本調査区の東側では遺物包含層が厚めに検出されている。

集落を構成する要素としては、竪穴式住居、簡易な掘立柱建物、貯蔵穴、大型柱穴の存在から推定される木柱列などが考えられる。木柱列は、新潟県南西部から石川県にかけての北陸の縄文時代後期後葉から晩期の遺跡で多く見つかっている。住居とする説や、祭祀遺構とする説などがある。本遺跡も当該期に営まれた集落であり、検出された大型柱穴がこのような巨大木柱列となる可能性は高いと考えられる。しかし調査範囲が限られるため、その形状や、集落の中での位置などは明言できない。本遺跡の大型柱穴は、柱痕下部に貼ったと思われる粘土が検出されるものが多く、複数回の作り替えが行われた形跡のあるものも多い。周辺の北代遺跡（中期あるいは晩期）、北代加茂下Ⅲ遺跡（中期前葉）でも柱痕下部に粘土を貼った柱穴が見つかっており、時代を超えた共通性がみられる。（安達）

### 3. 長岡八町遺跡の大型土偶を考える

#### ① 彩色された大型土偶

長岡八町遺跡から大型土偶の頭部が2点出土している。1点は今回の発掘調査で出土(A土偶と称する)し、1点は昭和35年に富山考古学会員の山内賢一氏によって採集(B土偶)されている。A土偶では、顔面向かって右側の眉端部から耳孔部にかけての側縁に部分的に薄紅色が観察できる。縁部だけに彩色を施していた可能性がある。一方、B土偶では顔面の額部や眉・鼻の隆起の基部に黒色のタール状付着物が細点状に観察できる。本土偶は、全体に黒色彩色されていた可能性がある。仔細に見ると、左眉上位の額部および右目の眼隆起上部に径2mmほどの赤彩斑点が付いている。赤色斑点は右目の外縁部にも微かに認められる。B土偶は黒色彩色を基調とし部分的に紅色彩色が施されていたらしい。両者は顔面が平板で眉や眼の作りが酷似し同一形式を成すが、彩色の違いがあったようだ。

#### ② 所属時期について

A土偶の所属時期を共伴遺物やそれ自身の属性から求めてみたい。共伴土器は、後期後半から晩期前半までが出土している。A土偶の頭部側縁に4個(左側頭部の1個は欠失している)の横長小突起を有する。小突起には三条の刻目文が施されている。北陸晩期中葉の中屋式土器では、鉢類口縁部などにB字状小突起を付す文様特色がある。A土偶頭部の小突起は、かかる中屋式土器のモチーフを表現していると思われる。

#### ③ 縄文祭祀の「文脈」のなかで

A土偶とB土偶は、中屋式土器併行期に比定できる。A土偶は、谷部から、大量の土器片や土笛状土製品、石棒、石刀、御物石器、独鈷石などとともに検出された。出土した石器類は北陸の中屋式期に存在するものであり、土偶との共存に矛盾はない。石器類はことごとく破損しており火熱を受けたものもある。石器には人為的な破壊行為が行われていると推察できる。

土偶の破損に関して「故意破壊」説がある。小野正文氏の「土偶の分配関係」・「土偶の分割遺棄」説(小野 1992年)などが著名である。

これに対して、能登健氏(能登 1992年)や渡辺仁氏(渡辺 2001年)らは非故意破壊説を展開している。最近、金子昭彦氏は土偶の破壊現象を、「つくり(大きさ、形、中空と中実)という物理的条件の違いから起こる壊れ易さの違いと解釈することができる」(金子 2003年)として、非故意破壊説を支持している。しかし壊れ易い部位に人為的破壊行為が重なっていることは無いのであろうか。分析の解釈次第で、アスファルトによる補修土偶や離れた地点の破片接合の事実について、故意破壊説、非故意破壊説いずれの立場からも解釈が可能であるのと同じ次元に迷い込む恐れもありそうだ。

金子氏が「同時期の他遺物の出土状況と比較して、すなわち文脈に照らして」土偶のあり方を見る必要があると説いている。この視点に賛同する。長岡八町遺跡の土偶は一括出土した「第二の道具」全体の中に「文脈」を求める必要がある。本遺跡では、意図的な敲打による石器の破損が認められる。石棒や石刀には、破損面に火熱痕が認められており、火を用いる祭祀行為の中で破損したと思われる。本遺跡の石製の「第二の道具」の破損率は100%である。それらと一括廃棄された土偶だけが、「物理的破損」であるとは考え難い。

#### ④ 土偶祭式の復原にむけて

渡辺仁氏は、北方民族の習俗などから、土偶を神像(女神)であり狩猟採集民の「山の神」を表わすと論じている(同成社 2001年)。神性の研究には、日本最古の歴史書『古事記』に登場するカミが参考となる。『古事記』の引用には批判的な意見も多いが、心性にせまることの出来る古い記録は他に無い。記紀に素材を求める吉田敦彦氏の仕事は、渡辺仁氏が「小説的推理による文芸的論説」(277頁)として一蹴するが、それほど無価値とは思えない。三浦佑之氏は、『古事記』の本文に関して「大和朝廷の中枢部で成立した国家の歴



史書ではない」「七世紀半ばから後半頃に、朝廷とは距離を置いたところで、——たとえばいずれかの氏族か知識人などの手によって、すでに存在した書物や語り伝えられていた伝承群をもとにまとめられたのではなかったか」(三浦 2003年 270頁)としている。

吉田敦彦氏が説く「ハイヌウェル型」神話(吉田 1993年)では、太古に殺害された女神の死体から、作物が発生したことが物語られている。これは考古学がいかに精緻な研究を行おうとも導きだせない人間の「心性」の問題なのである。

私が注目する『古事記』(倉野 1963年)神話の一つに、「火神被殺」がある。伊邪那岐命のもつ剣によって、その子「迦具土命」の頸が斬られるといった話である。その命が土製であることは名前から類推できる。記述は、頸から上だけが出土した長岡八町遺跡の土偶を想起させる。神話は、斬られた頭から成れる神の名は「正鹿山津見神」、胸からは「淤藤山津見神」、腹からは「奥山津見神」、陰からは「闇山津見神」、左の手からは「志藝山津見神」、右手からは「羽山津見神」、左足からは「原山津見神」、右足からは「戸山津見神」の併せて八神が成ったと記している。これらはいずれも「山の神」であり、「迦具土命」の本質は、渡辺氏が考証した土偶の「山の神」そのものである。「迦具土命」(土製神像)は、縄文人が生活の舞台とした山林を形象する「山の神」である。破壊された土偶の各部位から様々な「山津見神」が誕生したとする「故意破壊」説は捨てることは出来ない。

また、長岡A土偶とB土偶は同形式を成し同時存在と見なすことができる。顔面彩色に差異が認められるのは、土偶の有する役割の違いであると解する。A土偶は眼の表現が丸く作られている。これに対してB土偶は横長である。両者は大きさや表現が相似形で作製されている。「姉妹土偶」を表象しているようだ。『古事記』「木花の佐久夜毘賣」の項には、大山津見神(すなわち「山の神」)の女に、木花の佐久夜毘賣と石長比賣の姉妹神がいたとされる。前者は現世の栄を保証し曙=花=生を、後者は夜=石=死を象徴する。A土偶は前者で、B土偶は後者を象徴する姉妹土偶であったと想定する。神話世界の昼の女神と夜の女神は、縄文土偶の祭式を原型としていると私は推測している。(藤田)

#### 参考文献

- 小野正文 1992 「山梨県の土偶」『国立歴史民俗博物館報告』第37号  
金子昭彦 2003 「土偶はどれだけ壊れているか」『日本考古学』第15号 日本考古学協会  
倉野憲司校注 1963 『岩波文庫 古事記』岩波書店  
三浦佑之 2003 『古事記講義』文藝春秋  
能登 健 1992 「群馬県の土偶」『国立歴史民俗博物館報告』第37号  
吉田敦彦 1993 『縄文宗教の謎』大和書房  
渡辺 仁 2001 『縄文土偶と女神信仰』同成社  
富山市教育委員会 1998 『史跡北代遺跡発掘調査概要一ふるさと歴史の広場事業に伴う縄文中期集落の発掘調査一』  
石川考古学研究会 1998 『祭祀具Ⅰ』石川県考古資料調査・集成事業報告書  
酒井重洋 2000 「富山市長岡針原遺跡(八町遺跡)出土の遺物」『大境』第20・21号 富山考古学会  
富山市考古資料館 1987 『栗山コレクション目録』  
堀沢祐一 1997 「縄文時代中期掘立柱建物の一考察」『富山市考古資料館紀要』第16号 富山市考古資料館  
富山県教育委員会 1992 『北陸自動車道遺跡調査報告一朝日町編7一境A遺跡総括編』  
婦中町教育委員会 2000 『富山県婦中町外輪野Ⅰ遺跡・鏡坂Ⅰ遺跡発掘調査』  
「土偶とその情報」研究会編 1998 『土偶研究の地平』「土偶とその情報」研究論集(2) 勉誠社  
美濃晋平 1987 「縄文の土笛か？」『富山市考古資料館報』No.15 富山市考古資料館

滑川市 1979 『滑川市史』滑川市史編さん委員会

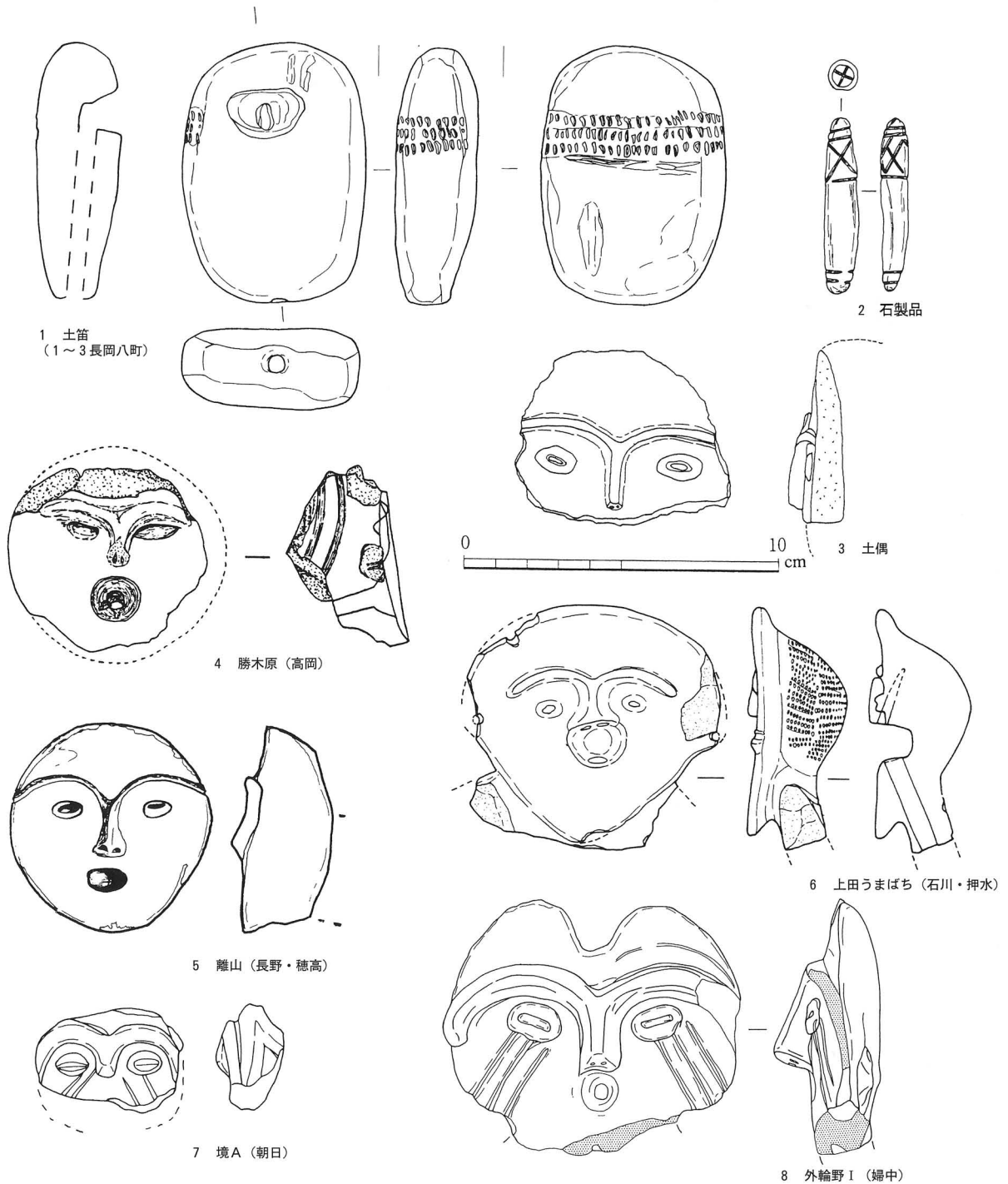
野々市町教育委員会 1983 『野々市町御経塚遺跡』高堀勝喜

南 久和 2001 『編年—その方法と実際—』

関 雅之 1969 「多孔底土器に関する試論—伴出時期と用途を中心として—」『越佐研究』第27集 新潟県人文研究会

井口村教育委員会 1980 『富山県井口村井口遺跡発掘調査概要』

小矢部市教育委員会 2002 フォーラム「環状木柱列と縄文の聖地」



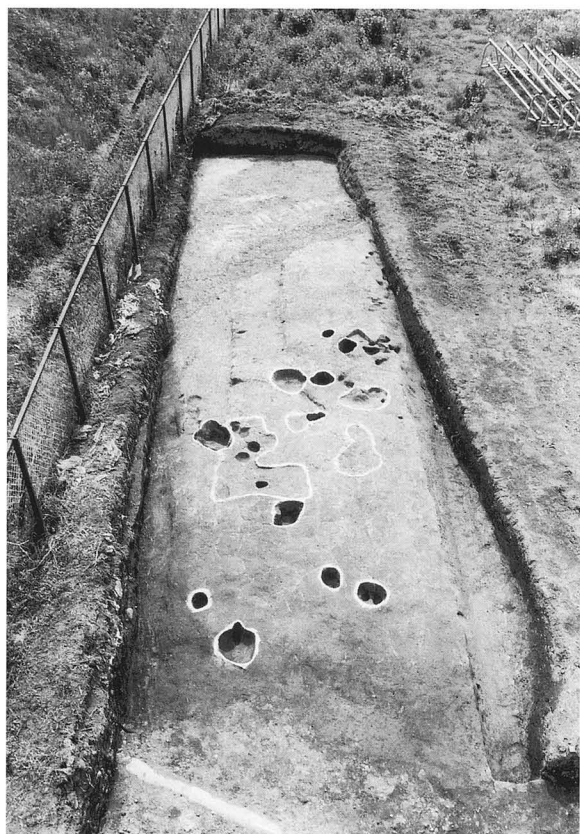
第15図 長岡八町遺跡出土土製品と周辺地域の土偶 (S=1/2)



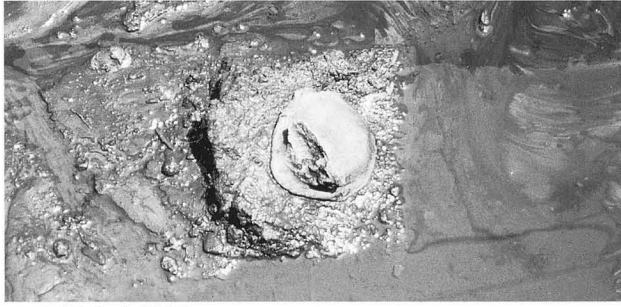
A・B区（谷部）全体写真（南から）



B区全体写真（南から）



C区全体写真（東から）



土偶出土状況



土偶出土状況



谷部土層断面図（北西から）



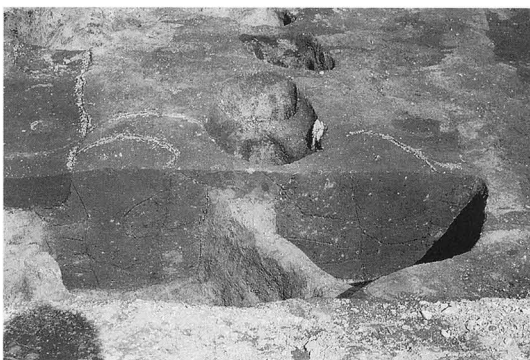
谷部遺物集中層



SK07・P24土層断面（西から）



B区（高台部）完掘状況（南から）



SK10・SK09土層断面（西から）



SK12遺物出土状況（西から）



SK10・SK09完掘状況（西から）



SK13遺物出土状況（西から）



長岡小学校6年生を招いての現地説明会



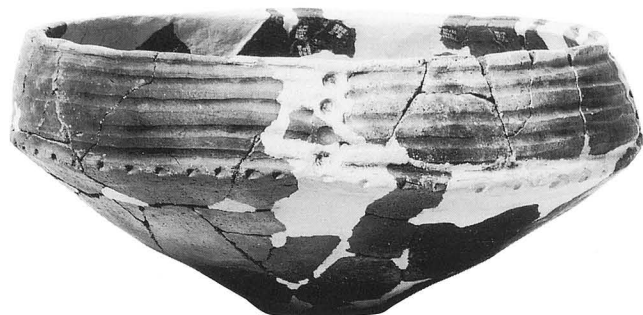
土偶（表・裏 約2分の1）



67

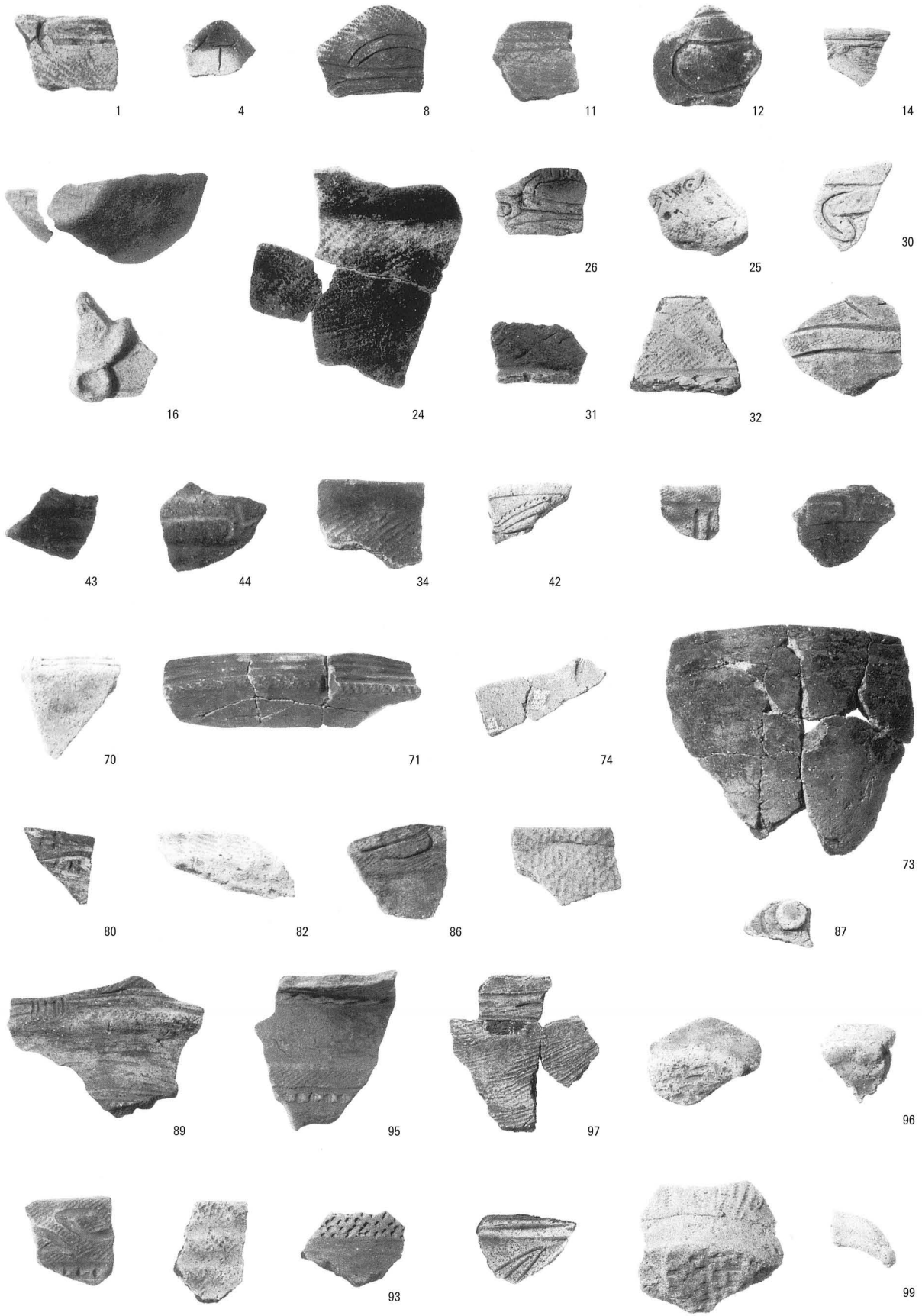


69



68

SK12出土縄文土器（約4分の1）

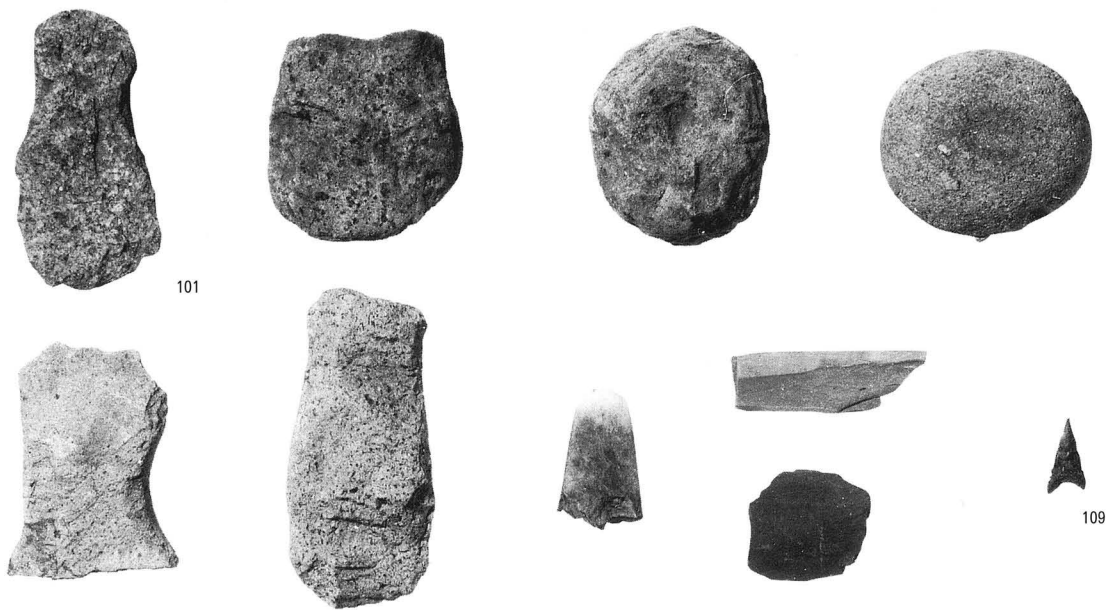


縄文土器 (約 3 分の 1)

写真図版 6



平成15年度発掘調査出土石器（118、110は約2分の1、他は約3分の1）



上段：試掘確認調査出土石器

下段：亀田氏寄贈資料（109のみ約2分の1、他は約3分の1）



# 報 告 書 抄 録

ふりがな	とやましながおかはっちょういせきはくつちょうさほうこくしょ							
書名	富山市長岡八町遺跡発掘調査報告書							
副書名	富山地区地球温暖化対策緑地（北代緑地）造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	富山市埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	133							
編著者名	安達志津 鹿島昌也 稲垣裕二 藤田富士夫							
編集機関	富山市教育委員会 富山市埋蔵文化財センター							
所在地	〒930-0803 富山県富山市下新本町5-12 TEL 076-442-4246							
発行年月日	西暦 2003年7月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ながおかはっちょういせき 長岡八町遺跡	とやまし 富山市 きただいしん 北代新他	16201	118	36度 43分 30秒	137度 11分 30秒	20030422 ～ 20030530	発掘190	北代緑地 公園建設 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
長岡八町 遺跡	集落跡	縄文後・晩期	谷部廃棄遺構、掘立柱建物、土坑、大型柱穴	縄文土器、土偶、石棒、石刀、独鈷石、御物石器、磨製石斧、打製石斧、石皿・砥石、筋砥石、凹石、石錘、磨石、被熱ヒスイ、石錐		谷部から多くの土器や石器とともに、北陸最大級の土偶の頭部が出土した。呪術具が火熱を受け破損した状態で出土した。		
		平安		土師器				
		近世		近世陶磁器				
		不明	穴	蹄鉄				

富山市埋蔵文化財調査報告133

## 富山市長岡八町遺跡発掘調査報告書

—富山地区地球温暖化対策緑地(北代緑地)工事に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告—

2003(平成15)年7月31日発行

発行 富山市教育委員会

編集 富山市教育委員会埋蔵文化財センター  
〒930-0803

富山市下新本町5番12号

Tel 076-442-4246

Fax 076-442-5810

E-mail: maizoubunka-01@city.toyama.toyama.jp

印刷 (株)富山フォーム印刷

